

ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (11)

—宿命の現代言語学から社会言語学へ—

末 延 岑 生

はじめに

筆者は1991年の論文で、「ニホン英語 (*Open Japanese* 図1) とは、日本語体系および日本人の生活体系が内在する、日本の文化とともに歩む言語である (末延 1991)」と定義した。それは母語としての日本語 (*Closed Japanese*) と英米人の母語である英語の特徴が見事に交じりあって合作された言語であり、日本人にとっては一世紀もの歴史の中で取捨選択を重ねながら醸造され受け継がれてきた、海外に向けての重要な第二の母語 (*Open Japanese*) といえる言語であり、その意味では「日本語の変種」である。

ところが規範文法を範とする現代言語学の言語観からすれば、ニホン英語は標準アメリカ英語 (Standard American English) から外れているという理由で、特に幼小中学校から高校・大学の英語教育の現場で、さらにセンター試験、共通試験の正解からほぼ完全に無視、除外されてきた。

英米のネイティブ英語の構造だけが標準語として均質的で論理的、科学的な言語だと公の場で強調し、何とかして“言語とは科学である”と学問の場で位置づけようと努力してきた多くの現代言語学者たちの観点からすれば、その基準から外れた変種英語の一つであるニホン英語は、非科学的な言語だとアピールすることがぜひとも必要になってくる。

だが、この信念こそが言語学的のみならず“科学的”にも明らかに偏向した言語理論に基づく言語差別であるにもかかわらず、学問的に平等に解決しようとする気配さえなく、その暗雲が今もなお日本のみならず世界の言語学界を覆っている。

本稿はトップ・ダウン式に君臨してきた現代言語学に代わる新鋭のボトム・アップ式の社会言語学が、ニホン英語と世界の変種英語の存在意義を、論理的にも社会的にも実証することを、言語教育者の立場から再認識し、啓発しようとするものである。

現在、21世紀初頭のヨーロッパにおいて、フランス英語、ドイツ英語、イタリア英語といった英米語の変種英語がどれほど多くの人々の間で使用されているか、その現状と原因をつまびらかにするには、フランスの社会言語学者アジェージュ C. の『共通語の世界史—ヨーロッパ諸言語をめぐる地政学』がある。以下に要点を羅列する。

「多くのヨーロッパ人の目には、英語が、人と話をして分かりあいたいという抑えがた

い欲求に最もよく応じてくれる言語のように映っている。この点で英語は共通語にふさわしい役割を満たしている。ヨーロッパの歴史の中で、英語以前に、これほど広大な空間を占有した言語はなかった (アジェージュ 2018 p53)。」それはなぜか。

「現在の状態から見て、英語を知っているヨーロッパ人であれば、相手の言語を学ぶつもりがなくても、別のヨーロッパ人と英語を使ってやり取りができるからである。こうして結果が原因に転ずる。英語は巨大な需要に応じてくれるので、今やほとんどのヨーロッパの国々で第一外国語として教えられている。多くの国では重要で定期的な関係を結んでいる隣の国の言語よりも、英語の方が圧倒的に高い地位を占めているほどだ。…さまざまの要因が結びついて、互いに強めあうことで、ヨーロッパへのアメリカ英語の普及が揺るぎない傾向となっているのである。(p55)」

しかも、著者によればヨーロッパの多くの国で使われている英語は、それぞれの土地、文化独特の英語の変種であり、それは英米英語の「非母語的変種 (NonNative Varieties of English)」と呼ばれ、現代社会の中にしっかりと根付いているという。こうして世界の60数カ国 (末延 2011、図 1 参照) の国々が英語を非母語的変種として、自分たちの使いやすい変種英語にして世界中で使われているのが現状である。ところが日本は日本文化の結晶であり英語の非母語的変種で、見方によっては本稿の最初に述べたように、「日本語の変種」ともいえるニホン英語を無視し、むしろ一世紀前からのアメリカ崇拜の忠誠へのためにアメリカ英語の模倣教育としてさらに強めようとしてきた。

日本は敗戦以来 70 数年、独立はしたものの今も政治的にも言語面でも、米国の植民地政策のようなわが国の英語教育は、今もその言語観は変わるところか、深くアメリカ文化、アメリカ英語に染められてきた。私事ながらそれに気づいたのは小学 5 年生のとき、父から学んでいた英語がきっかけであった。日本人のくせにどうしてみんながわざわざ英米英語を真似なくてはならないのか？それなら世界の人々はいったいどんな英語を使っているのか。

24 歳の時その実地確認のため、英米はもとよりヨーロッパ、北アフリカ、インド、東南アジアなど数十カ国をめぐった。その結果予想通り、当時でさえすでにドイツ英語、フランス英語、イタリア英語、インド英語、香港英語など、民族の文化独自の香りゆかしい英語を編み出すという健全な言語観と世界観を持ち、無理に英米語の真似をさせられて苦しむ人たちを見るようなことは皆無だった。それどころか時には「君はどうして英米英語のような真似をするのか、日本はアメリカの属国か」と問われ、まるでその通りであるだけにその屈辱に耐えながらも、国々所々の英語を楽しんだ (末延 1966, 2008)。

この経験を元に、その後筆者は現在に至るまで英語教師として、せめて独立国の国民としてアメリカ英語の模倣に殉ずるのではなく、堂々とニホン英語を使う日本人への転向を

アピールしてきた。ところが2020年から日本の英語教育が、もはや取り戻せない方向に進む可能性が増してきた。半世紀にわたって英語教育が若者に与える苦しみの実情（末延2019）を身近に触れてきた筆者は、今こそその思いを記録しておかずにはおれなくなった。

さて、ことばを学び教えるための学問として、世界にはさまざまな理論をもとにしたあまたの「言語学」、「言語教育学」の学派が存在する。だがそれぞれの言語観、世界観を、未熟ならともかく万が一にも、見当違いの誤った概念、理念のもとに動かしているとすればどうだろう。応用言語学としての世界の言語教育、外国語教育、中でも英語教育の未来は、日本が戦時中台湾や韓国等に仕掛けてきた数々の言語的残虐行為（末延2017）の、国内での繰り返しという結果が待っている。そして多くの学習者を路頭に惑わせ、苦しめ、時を待たず日本の文化は土台からくずれ去ってしまうだろう。以下は、以前ある学会からの要請を受けて、筆者のニホン英語に関する講演の後、ある著名な言語学会の会長の感想のことばである。

「私たち日本人は西洋の学問を学び、それを若者に教育してきた。まさにアメリカさんのおかげである。これからもアメリカ英語と共にある。文科省をはじめ私たちがそろって目標としてきた本場のアメリカ英語を無視し、ニホン英語などという無礼なことばを作り出すとは許しがたい、第一アメリカさんや私たち英語教師に対しても無礼ではないか。こうした恩をあだで返すような言語教育は、百害あって一利なし、若者によくない考え方でず。…（末延2010より）」と。

半世紀にわたってニホン英語を提唱してきた筆者一人が間違っていて、上述の会長さんのような、日本では少なくとも30万人はいると推定されるアメリカのネイティブ英語の模倣に忠誠を尽くす英語学者や先生方のほうが正しいのか。前者の間違いなら、せめて筆者とほんの一握りの賛同者が考え方をあらためれば済むことだろう。がしかし最も危惧されるのは、もし、万が一にも、後者の先生方のほうが誤っているとすれば、学習者たちへの影響力は計り知れないだろう。これは第4章で詳述するが、重大な言語偏向教育の実態がすでに外国では賠償問題が発生している。

紀元前の昔、アテネの町では、ソクラテスやプラトンのような哲学者たちさえ、生きる意味を探るためにかれらの母語、方言を用いて土地の人たちと熱く哲学を語りあったという。これが硬いギリシャ語の標準語で第二言語だと互いの心が伝わりにくいこと、互いが腹をわって本意で話すことなどできないことがわかっていたからである。

近年日本では続々とノーベル賞科学者の田中耕一、山中伸弥、益川敏英氏などが登場した。驚いたのはそれぞれの先生方が英語の苦手を正直に披露したことだ。これは日本の英語教育は今まで何をしてきたのかとする強烈な批判だと、筆者は受け取った。高邁な理想を掲げ、難しい英米英文法の構造と発音を一字一句たがわず植えてきたはずの教育

を受けて、世界をリードするべきはずの英語教育が、これほどの世界的な頭脳の彼らにさえ苦痛だったのだろう。

彼らは一様に若い間から英語に苦勞させられたことを述べたのち、学者として最も大切な思考という作業のための言語手段は、所詮、外国語としての英語のようなものではあかないという。コミュニケーションのためであれば英語もさることながら、豊かな母語、しかも生まれ育った地元の方言としての日本語でじっくりと落ち着いて思考し、生まれたときから身につけていまや身心の一部である日本語（の方言）を発想の原点としてきたことが賞につながったと語っている。考えてみればこうした主張は我々凡人でもそんなに驚く話ではない。

本稿ではニホン英語が言語学的にも正当な言語の一種であることを明らかにするために、従来の規範文法中心の現代言語学の言語観の反省を試みる。同時にそれと並行して発展してきた社会言語学、中でもアメリカのSAE (Standard American English) の規範を優先させ、AAVE (African American Vernacular English) を不当に支配する言語文化に対抗してきた、反人種差別主義者であるアメリカの言語学者ウィリアム・ラボフを代表とする社会言語学者たちの言語観が、今こそ人類のためにいかに有用かを吟味する。そしてその中心となる「変異理論」の正当性から、ニホン英語の存在意義とその必要性へと話を進めてゆきたい。そのためにはまず私たち人間にとって文化とは何か、言語とは何か、それはどのような環境の中で生まれ、発展するのか等について触れておきたい。

1. 文化と言語

「言語と文化」という名の論文や著書が言語学者の間で多く見られるが、筆者は“言語は本来文化に根ざしたもの”という観点をとってきたので、本章の表題のような順序になった。だから言語学の何たるかを述べる前に、文化とは何かを述べる必要がある。言語は文化の重要な一部を占めると同時に、文化を作り上げる元となるからだ。

さて、地球上に住む人間はもはや80億といわれる。熱帯、温帯、冷帯など気候、環境に大きな違いが見られるなかで、これらをもとに人々は自らを棲み分けている。そしてその特徴を示すものは、各民族、各国、そして各地の文化であるといっている。ではその文化とは人類の間にどのようにして生まれ育ったのだろうか。

古くからのタイラー E.B. の定義をここに引き出すと「文化または文明とは、知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習その他、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や慣習の複合総体である (タイラー, E. B. 1871)。」という。また西原によると、文化というものは「人間が生得的に持つものではなく、人間が生まれ落ち、置かれた環境や身の回りの共同体の成員から伝承され、共有していく知識のことである (p222)。」という。

言語文化

高等動物にも原初的な文化は見られるが、知識およびわずかながら知恵としての文化に限るなら、人間のそれとは次元が異なるといわれる。その反面、知恵としての文化は高等動物にあってもほぼ本能として体内に蓄積されてきたといえる。しかし人間の文化には他の霊長類には見られない点がある。それは人間の長い歴史の中で、よきにつけ悪しきにつけ日々努力することによって、さらに学習することによって改善がなされてきた、即ち次世代に伝承する知識と知恵を持ち続けてきたことである。

そうした知識と知恵の集大成を築くことで、人類に大きな役割を果たしてきたのが言語である。それに先立って言語と文化はどちらが先かということになるだろうが、文化と言語は互いに助け合っているのも、それぞれを別個に論じることはできないしすべきではないが、分類上は文化の中に言語を含ませるのが妥当だろう。文化とそれに文化を築く人間が変われればその影響を受けて言語も変わるだろうし、その逆もあるだろうから、文化や人間集団、社会から遊離した自然言語はありえないと断言していいだろう。

人間が個人としてこの世に生を受けた瞬間から、自分の置かれたまわりの環境からの刺激を自然に受け入れる（認知）能力、そしてそれに反応する能力を持っている。つまり文化を我が物にすることができる能力を先天的に宿しているということだ。とはいえその多くは親から先天的に譲り受けた本能的なものではない。親をはじめまわりの人々から一つ一つ音声や文字などを努力して学ぶことによって、訓練によって達成できる（末延 2006, 2018）。それも比較にならないほどいとも簡単な方法、つまり文型練習（Pattern Practice）で、他の霊長類とは比較にならないほどに早期に達成していることだ。だから人間の子どもは生後一歳半頃にことばを話し始め、2歳頃には語彙の数も、ある日溜まっていたものがいきなりとも思われるほど急激に一語文が増えるといわれる。それはやがて知恵となってひろがる。それが個人のレベルを超えて共同体の中ではぐくまれる時、それは「言語文化」と名づけてもよいだろう。

言語とは何か

人間同士が使う言語は、人々の間で自然発生した共有のルールによって話された音声、相手に聞かれ、あるいは文字として書かれたことばや記号が相手に読まれることによって互いに伝わり合う、つまりその内容が確かに互いに達し合う（伝+達）ことによって初めてコミュニケーションの範囲が広がってゆくという過程を有する、非常に有用な手段である。

『世界大百科事典』によると「人間同士の意思伝達の手段で、その実質は音を用いた記号体系である。…言語がどのような形で人間社会の中に存在するのか、すなわち、その社会における発話行動の総体の中に存在するのか、あるいはその社会の成員の脳裏に存在

するのか、について種々の議論があったが、正確には、まさにその二つの形をとって存在しているというべき」と書かれている。さらに言語の機能^(注1)としては「人間の意思伝達的手段、思考を支える手段、自己の感情の表現手段、あそびの手段といった機能をあげることができる。…まさにそういうものとして言語は発生し発達し、また、そういうものとして人間社会を成立させてきた。」と記されている。

言語社会学者のフィッシュマンによると、言語は「内容である。伝達手段は伝達内容である」と言語自体の存在意義の本質を看破する。さらに言語は、「顕在的な内容であれ潜在的な内容であれ、そうした内容の単なる運び手ではない。言語それ自体が内容であり、(忠誠と敵意の対象であり、)社会的地位と個人的関係の指標であり、情況や話題ならびに社会の目標の目印であり、各ことば共同体にとってその特徴を示すところの規模大にして多様な価値が一杯につまった交際の場である。(pp.5-6)」と。

ところで特に最近の英米のネイティブ英語は通じない傾向が世界でも最低の部類にある(末延 2012)。このことはこの類型化研究を通じて何度も警告してきた。言語学をして言語学者の理想を実現たらしめるためには、規範や形式を重んじるあまり、ことばは通じなくてもいいのかと問いたくなる。反論として英米英語の母語話者の言語が正しいに決まっているのだから、それが正しく聞き取れないのは聞き手のほうが未熟だからと言い張る。時には意味さえ無意味とする現代言語学、それでも言語学だろうかと疑いたくなる。言語学は、自明のことだが、内容を通じさせるために、コミュニケーションをより明瞭にというのが目的でなくて意味がない。これについては次章のコミュニケーション能力の項で詳述する。

言語はすべて平等であるとはいえ、どの文化もすべて平等とか差別偏向がないとはいえない面がある。たとえば性差別や封建主義、帝国主義のはびこるといった差別のある文化の程度の応じて、またその社会の言語を通じてその社会、文化の程度がわかるということである。それは戦争を好む文化、拉致文化、新自由主義文化、賄賂や忖度、国家文書を白昼堂々と歪曲することが特別に許される文化・社会、さらに弱者をいじめる社会等である。

言語文化の強制

グッドイナフによると「ある社会の文化とはその構成員に受け入れられるような方法で生活するために、構成員が知り、信じなくてはならないことすべてである(1957 p167)」と。その社会の受け入れなければならないすべて、信じなければならないことすべてという意味の中身として最も重要な役目を果たすものこそ、それぞれの社会で使われる独自の言語ということになるだろう。

しかし、日本の英語教育では従来センター試験や共通試験でアメリカ英語に忠誠を尽くすことを強制される英語教育に子孫たちが苦しむことなど、それを統制するのが国家

や言語学者たちだと考えれば、取りようによってはこの理論の驚くべき深刻さが読み取れる。彼らの言語観一つで、受け取り方ひとつで、大衆の知らないところでとんでもない言語文化、つまり言語に左右される文化を生む可能性があるからだ。^{注2)}

その端的な例は自国文化の他国文化への強制、目を覆いたくなるような日本の台湾侵略と言語政策(末延 2017)であり、自国言語を優先する政府が植民地の言語を規制した。そのような社会が伝統として今も継続しているからこそ、逆に日本人として当然ニホン英語を使う権利を主張する人々に対して、ネイティブ英語を強制する政府や英語関係者たちはそれを日本の英語教育政策として今も強制しているのだろうか。これらは本来言語学の問題であり、最近では強制とはいえないが、日本におけるここ半世紀以上の長きにわたった現代言語学の圧倒的な威力とその英語教育への影響があるが、これらは追って述べることとする。

2. 現代言語学の実態

言語学とは何か

人間にとって言語というものの実体とは何か、それはどこでどのように生まれ発達を遂げ、現在人間社会の中でどのように使われているかを探るために、「言語学」という学問が存在する。そのためには文法などの言語の構造を分析することも必要だが、それが使われているそれぞれ異なった人間社会の文化の中身を、その言語およびその近隣の言語とともに研究する必要がある。それぞれの言語はそれぞれの文化の中で文化とともに育まれてきたからである。ここに言語と社会の関係、社会言語学が必然的に成立しなければならない理由を見出すことができるのだがこれは第3章で詳述する。

たとえば『現代英語学辞典』(成美堂)によると、言語学とは「言語の本質・構造・他の文化諸現象その関連・および言語の歴史的変化の研究を目的とする科学である。…」と書かれている。ここでは言語の誕生の場である「社会」「集団」「人間」という語が皆無である。一方『世界大百科事典』(平凡社)によると、言語学とは「人間の言語を研究する学問分野。人間の言語の第一義的存在が音声言語であることから、言語学はおもに音声言語を対象…」とするといい、上記の語が多数(社会は8回、集団は4回、人間15回)出てくる。言語観の相違がここに明らかである。

このように、ことばは本来社会的行為であること、人類が社会的に機能するためのコミュニケーションのために存在することは誰の目にも明らかだが、現代言語学は言語と社会との関係を絶ち、その上言語が獲得・習得される過程やそれが使用される状況などよりも、単に言語の一側面である構造を大上段に取り上げて研究することに留まるようである。

従来の言語学は歴史的な観点から、言語を先祖からの恩物として相続すべきものと考

えられてきた。このように従来の言語学はどれも言語の内部面の言語形式を中心に、各言語の統語、形態、音声・音韻といった構造等を説明する構造言語学の発展に専念してきた。

トップ・ダウンの言語学

伝統的言語学を堅持してきた現代言語学では、文法は固定化した規則であるという考え方もつ一方で、ソシュールが生前にアメリカの言語学者ホイットマンの影響を受けてまるで遺言のように、切に提唱してきた言語と社会環境との融合（末延 2015）をその後の言語学者たちは無視してきたといえる。

たとえばチョムスキーの生成理論は、それを説明するために生得論や認知能力などをその原理とし、むしろ言語研究の理想化、均質化のために複雑な社会環境の存在を犠牲にする傾向にあったようだ。長期間にわたって人間の社会環境の中で生まれた言語が、訴えてきた形式にこだわるあまり、内容よりも社会と分離して内部形式の如何をたどることは、こうした現代言語学と呼ばれる学問形態が明らかにトップ・ダウンの言語観として現代の言語学そのものを代表するといっているだろう。

日本における現代言語学の実態

では日本の英語教育から見た現代言語学について考えてみよう。日本では19世紀後半から20世紀の後半にかけて、大学や専門機関では依然として明治以来の英米文学の輸入・紹介と難解な英文法の形式的研究を第一とする英語学者・教師がその大部分を占めており、そこでは英語教育の専門家はほぼ不在であった（末延 2015）。

当時の日本社会ではそのような実情への反省を込めて、明治以来国際社会の仲間入りを目指してきた日本の社会は、国際化への準備として英語教育に大きな期待を寄せるようになっていた。中でも社会や企業が英語教育に対して渴望していたのは、英米文学や英文法ではなく英語の4技能、中でも日本人が最も不得意とする聴き話す能力の推進であった。

それまでは訳読授業が普通であった授業形式も、中学・高校の段階でコミュニケーションを目的とした授業へと方向を転換することを余儀なくさせられようとしており、アメリカの心理学者B.F. スキナー等で代表される行動主義を基とするミシガン方式の英語の文型練習の徹底など、全国の中学から大学までの英語の先生方を中心に、日本視聴覚学会やLLA (Language Laboratory Association) をはじめとする英語教育関係の学会が盛んに活動し始めたその矢先、突如現れたのがチョムスキーの文法復帰生成言語理論である。

さてチョムスキーはアメリカの言語学者、思想家で、生成文法理論の提唱者、形式言語理論の分野の創始者でもある。その言語観は、人間は「生得的言語能力」を備えていると考え、人類の言語の文法には普遍的な法則があり、幼児はそれを生得的に持っているから、本来はゼロから学ぶ必要がなく複雑な文法を駆使できるという（末延 2018 pp38 - 47）。

彼が批判する行動主義の考え方も、極端な人間機械論的な側面を持つことは事実であるが、彼はその行動主義的な言語理論を二元論の立場で、あえてギリシャ時代の哲学者の言語本能論や W.V. フンボルトの言語普遍論を武器に行動主義を徹底的に批判、言語学界、言語教育学界にその「本能論」を浸透させた。顧みるとこのチョムスキー旋風は、言語教育学の視点からすれば、明治以来の日本の英米文法学者の学問的斜陽（末延 2015）を救った神のような存在であった。

さて一時的とはいえ、日本は今までの英語教育の反省とともに実際面の役立つ英語習得の方に目的が向かっていった矢先に、行く先に不安を抱えていた英語学者たちは、この機を逸すことなくチョムスキーの生成理論を研究課題とすることに精進した。たとえばチョムスキーの生成理論を紹介した、当時日本の英文法学を席卷していた東大教授中島文雄の『英語の構造』の出版は、予想通り英語学者のみならず全国の英語教師たちの間で、瞬く間に大ベストセラーとなった。そこで書かれている内容の一部と、当時二十代の筆者が本書の文末に走り書きして挟んでおいた感想文の切れ端をそのまま紹介する。本書の文頭から、

The man put his suitcase on the ground.

文の構造を説明するには、まず the man という名詞句と以下の動詞句と、二つの構成要素に分けるのが第一着手であろう。そして動詞句はさらに put という動詞、his suitcase という名詞句、on the ground という前置詞句に分けられる。前置詞句はさらに on という前置詞と the ground という名詞句にわけられ、最後に the man / his suitcase / on the ground という名詞句が、それぞれ the/ his という限定詞と man / suitcase / ground という名詞に分けられる。…（中島 1988p 1）」と書かれている。「男はスーツケースを地面に置いた」という意味であることをすぐわかる。それは単語の意味と文の構造が分かっているからである（p 1）と書かれている。

英語を母語とする人たちは、チョムスキーが言うように、たぶん脳の言語中枢部位の中で光の速さでこのような行程を通じて解読する“天才”なのだろう。たしかに教養としてこの事実を知っていることに異存はないとはいえ、ネイティブの英語話者に限らずどの母語話者もそれぞれに分け隔てなく母語に関しては同じくその能力は当然持っている。だが文化も言語も全く異なる日本の中学一年生の新学期程度の、ほんの少しの英語力で、上記のような文法による解読作業が、本当にかねらの小さい柔軟な脳の中で行われるようにさせる必要があるのかどうか。しかも外国語としての英語で、である。筆者の素朴な疑問であったが、彼らと同じ脳内行程を模倣させる必要があるのだろうか。

現実是这样である。たとえ英米文法がまだほとんどわからない中学生でも、母語としての日本語の本来の推理力があれば、この程度の英語の基本単語の羅列なら誰にでも多少

の意味がわかる。語順がバラバラにされていても、世界中の人が推理でわかる。語順に関わらず *man, suitcase, ground* だけで誰でも大体見当がつく。ことばの構造としての語順(末延 2013a) の役割りというのは、言語学者たちがいう、一字一句とてまちがえれば絶対に届かないというような、メールアドレスの厳密さとは根本的に違う。

さらに本書の中ほどでは「主語の I が議長であって開会を宣することばとして、I ということで *I declare the meeting open.* であって *open* の前に *to be* をおくことはできない。この場合の *declare* は作為動詞に入るべきもので、作為動詞の場合 *to be* の省略は義務的である。… (p75)」という。 *to be* をつければ間違いであっても、意味がまったくわからなくなったり、変わるという代物でもあるまい。

また、「*It is beginning raining.* も可能ではあるが、*-ing* 形の重なるのをきらって *It is beginning to rain.* というのが普通である。(p135)」という。ここがネイティブ・スピーカーの天与の、天才的な英語能力だという(それなら日本人は日本語とニホン英語の天才である)。私たち日本人も英語を使うときネイティブ話者たちがきらうことは、誰でも皆きらわねばならないのか。しかし、もしここでニホン英語を認めるなら、本書に出てくる「~できない」「~べき」「義務的」「可能ではあるが」「きらって」といった禁止表現の多くは使う必要がなくなる。

こうしたアメリカ英語の規範文法に名を借りて鎮座する、日本全国を制覇したトップ・ダウン思想の典型である新しい言語学は、言語の多様性を言語観とするボトム・アップとしての「ニホン英語」を提唱してきた筆者の観点から見れば、真っ向からその観点は逆であり、到底納得できない内容であった。

そのころ 20 世紀の後半ごろから、欧米では同時にもう一つの動きが見られた。構造言語学の始祖として知られる F. de ソシュールも、没前にはホイットマン(末延 2017) の影響を受けて言語と社会学との脈絡に関心を持っていたこともあって、欧米では社会言語学という新しい言語学が形となって動き出していた。これについては第 3 章で詳述する。

生成文法理論とその影響

当時、言語の誤謬研究に携わってきた若輩の筆者から見たチョムスキーの生成文法理論とは、さらに次のようなものであった。それは彼の『統辞理論の諸相』*Aspects of the theory of syntax* (1965・69 p59) の中の、彼が推し進める生成文法理論の土台となる最も重要な、次のような内容とその理論がすべてを物語っていた。

「言語学の理論は、なにはさておき、まったく均質な言語共同体における理想的話者・聴者を対象とする。この理想的話者・聴者というのは、その言語を熟知しており、この知識をじっさいの言語運用において使用するさいに、次のような文法には関与的でない条件によって影響されることがない。

—記憶の限界

—気が散漫になること

—注意や関心がそれること

—いいまちがい (たまたま起きるのであれば癖になっているものであれ) (ランゲ p46)」

ちょうどそのころ、筆者は英語の多様性の実情を観察すべく世界一周旅行を終えて、いよいよこれからは英米英語が世界中でさまざまに形を変えて、「ニホン英語」を含め、国際英語、世界おける英語の多様化の研究と言語の誤謬分析研究とそのキャンペーン (末延 Speech Error Analysis 1973 から *Errorology in English* 2002 を経て現在に至る) に取り掛かり始めた矢先に、「均質的」ということばに釘付けとなった。

ただ青天の霹靂であり、大きな驚きとともに失望を味わったのを覚えている。それでは筆者が世界を巡って耳にし、口にしてきた多くの国々の人々のさまざまな生きた英語はすべて幻だったのか。ただ、訪れた米英の英語でさえチョムスキーのこの「均質化され理想化された言語」とは程遠いことだけは確かであった。

我田引水といわれるのは承知で、これは母語の学習過程にある幼児の「幼児語」や、外国語学習者の「生徒語・学習者英語 (末延 1992)」、言語障害者のことばに対して問題がないか、言語という大らかで実体のある生き生きした存在から見て、彼らのこの言語理論はかえって言語学の範囲を狭めるのではと考えた。言語とは上品なもの、同じく文化とは上品なものとなれば、未開といわれる土着文化は葬られるだろう。

第一に、筆者が生を受けて以来接してきたことばということば、人間の使う言語という言語は、すべて均質でない言語ばかりではなかったか。均質な言語などいったいどこにあるのか。もしあるのならそれはどんな人が使っているのか。筆者はむしろこうした非均質なことばの中に人間性が見られると考えたからこそ、中でも外国語学習者のことばを中心に研究してきたのだ。まさにこれでは言語差別的であることはもとより、人間差別、学問差別そのものの理論、言語観であるとさえ直感した。

チョムスキアンのような規範文法信奉者から見れば、「ニホン英語」は当然誤った英語であり、すべての誤文の先頭にアスタリスク (*) を付与すべきであって、その間違った英語を研究することこそ、間違いなく間違った研究であるから学問とはいえない、だから学問とは見做さない、と。この理論からいえば筆者の研究対象としてきた「ニホン英語」など誤文を意味するアスタリスクだらけで、まるで掃き溜めの痰のようなものだと言明するようなものである。

代わりに彼らの編纂した辞書や参考書は、ほぼすべて均質的な語や文法で埋まっている。あまたの論文の中では正文の正当さを示すために、筆者から見ればとうていありそうもない「誤文」(筆者の中にはそもそも「誤文」という文字はない) である。幼児のこと

ばも人間のこともばもそもそも「間違い」などと決めつけることができないからだ。なかでも理論形成のための過程で使われる多くの文は、時には自然には起こりえない誤文をわざわざ捏造し、それと比較させることで正文を正文たらしめるという方法をとっている。許しあい寛容であるべく醸成されたはずの言語が、こうして均質化、規範化、浄化とその理想化、言語純粋化され、その権化としての言語理論が、日本ではまるで唯一無二で究極の現代言語学として君臨、現在に至っている (末延 2008)。

生成理論に対する反論

チョムスキーおよびチョムスキアンたちが1965年以来唱えてきた「理想的な話し手・聴き手からなる均質・等質な言語社会」という言語理論に対して、当然とはいえ世界中の言語学者たち、中でも社会言語学者たちから猛反論が相次ぎ、この理論を人間が生活を営む社会から現実離れた「観念の産物」と表現した人たちもいた。こうした相次ぐ反論の、ここでは紙面の関係上ごく一部をまとめてみよう。

たとえば、ランゲは、「これによるなら、つまるところ、(チョムスキーの用語である)『言語運用』は、(同じく彼の用語である)『言語能力』の理解のさまたげとなる要因以外のなにものでもないであろう (p47 カッコ内は筆者)」とさえ言い放って彼らの自己矛盾を突いている。また Fisher1958; Levine/Crockett1966 などによる研究の結果、どんなちいさな言語共同体であっても均質的であったことはなく、根本的には言語は混質的なものであることがわかったという。ランゲはさらに「チョムスキーの言語能力という概念が持つダイナミックな構成要素は、文を作る能力だけに関わる。…この均質化はさらに徹底されているのである。(pp46-7)」という。均質化のための言語学研究ともいえるものであり、身長にあわせてベッドを作るのではなく、ベッドに合わせて足を切るの論である。

次にロンドン大学の言語学者ハドソン R.A. によると、均質な社会というのは「全員が全く同一の言語を持つ、つまり構文単語発音あらゆる語の意味範囲が完全に同一なそういう社会 (p16)」といい、架空の社会の言語以外の何物でもないのである。こういう社会では方言話者も研究者たちも、もちろん外国語の「学習途上語」の言語も、幼児も言語障害者たちも、のけ者にされてしまう。日本では現実にニホン英語をしゃべる者は英語学習からのけ者とされ、点数がもらえない。それ以上に第一、それを研究対象とするというのはもってのほかというのだ。社会を無視した現代言語学者たちの世界の夢空言である。

さらにハドソンは「世界には約4,000ないし5,000の言語があるのに、国家はおよそ1,407しかないという事実 (p22)」から、これを「チョムスキーが理論言語学で研究すべき対象であると定義した類のもの (チョムスキー1960の3) は架空のものでしかないことを示すことにあった (p.18)」と述べている。また「一個人にとってであれ、一つの共同体に取ってであれ、均質の文法などというものは存在しないし…、発音の差異はとり

わけ社会的意義を持つ p35」と差異の存在をむしろ積極的に捉える。

生成理論で驚かされたことはこれだけではない。チョムスキー (2006 p150) は「あらゆる人間の言語の基底には、普遍的であって、人間のみが持つ知的属性をまさに表現する機構がある」とするフンボルト W.V. の理論を固く信じていた。つまり、言語は本当は学習されるものではなく、したがって教えられるものでも当然なく、適切な環境的条件が整っていれば、本質的に前もって決められている方法で、言語は「内部から」発達するのだという考えであり、「第一言語を教えることは本当にできないのであって、学習というよりは成長のような過程により、自然的に発達できるような筋道を与えてやることしかできない。」という。

まず言語内部発達説は仮説としては認められるとしても、これは母語に限って言えるかもしれないことを前提としておく必要がある。まじめに外国語学習をする人にこれを当てはめることはできない。こうした単なる仮説を誤解するところに、大きな混乱が生じるのである。

また、言語人類学者ドランティによると「この理想化プログラムは、実際に問題として少なくとも今のところ、ある言語共同体に混合や不純がある程度存在することが看破されたなら、その共同体の言語を研究してはならないということになってしまう。…『混合や不純』をある程度含む共同体というのはもちろん、すべての共同体ということになる。となるとチョムスキーに従えば何事も研究してはならないということになってしまうが、そんな馬鹿げたことがないのは明らかだ (ニール p18, 今井訳より)。」と述べている。

次に言語社会学者フィッシュマンによると、チョムスキーの 1957、1965 年の論文等に対して「最近、多くの言語学者は個々の言語の構造より言語『一般』の構造を調べるようになったが、ネイティブな話し手の言語能力を説明する基本的人間能力の性格を発見するためにそうしたのである。ネイティブな話し手は、自分でもふつう見逃しがちな、稀なる天与の能力をもっている。すなわち彼らのことば共同体において構造的に受け入れられると認められる文を生成し、さらに重要なことに、そうした文だけを生成する能力である。(p147)」という。言語の一部としての文はたしかに重要な部分ではあるが、文構造だけを見てその使用を窺うという狭い言語観を暗示する。

さらにフィッシュマンは「多くの言語学者は、今、妥当な文法 (すなわち native な話し手が暗々裏につかんでおり、そのネイティブな話し手の能力を構成する規則) を解明しようとする言語理論は、同時に人間の言語獲得および言語使用の性格を解明しようとして信じている。これらの言語学者は、言語を獲得し用いる人間能力の妥当な理論だけが言語それ自体が何であるかの妥当な理論を生み出すだろう (p147)」という。

またチョムスキー (2006 p352) の解説にも見られるように、「言語能力が人間の脳に備

わっている」と仮定するという器官機能説の提唱である。これは英語脳や日本語脳が脳内にあるような錯覚を与え、ケーキを食べても“別腹”があるからそこへ流れる、別の胃があるからと信じる人たちと似ている。確かに言語機能を司る部分は脳に宿るであろうことは古くから仮説されてきたことではあるが、この部分はそれだけのためにあるのではない。これは明らかに非科学的解釈で、しかもこれこそがこの説を信じる人々の混乱と誤解の元となってきた。つまり人間は本能的に言語能力を所有しているのだから、人間は習得の過程を踏むことなく言語を駆使できるのではないか、という日本の英語教育者や学習者たちに誤解を与える文面もあったことも事実である。

このように内在的言語能力の存在を仮定することによって、日本人の多くは言語学習には本来は訓練は不要なものとし、中でも生得性が強調されるあまりに言語の学習・習得は不要と判断する傾向が強くなり、やがては学習も練習も訓練もする必要はないと言っているのだと誤認し、挙句に文法の研究こそ大切と曲解したと思われる。

さらにフィッシュマンが「生成変形言語学がコミュニケーションの意思（目的）抜き統語論的構造に焦点をあわせた (p152)」と指摘したように、生成理論の言語観ではことばは本来コミュニケーションのためにあるのではなく、思考するためであって、しかも個人であるものだからその行為は社会とも直接に関係はないとする考えによるものだったのではないか。それに関してチョムスキーは「ノーベル賞受賞者フランソワ・ジャコブは『個人間の伝達システムとして言語が果たす役割は二次的に生じたものに過ぎない』」ということばを引用 (2006, 2011 p335) している。

しかしことばは社会的環境のもとでこそ成長し、発揮されるものである。たとえ生成理論の本能説や内部発達説、器官機能説、個人思考説が正しいと仮定されたとしても、コミュニケーションのためには打ち出の小槌も振らなければ何の役にも立たない。さらに生成文法における言語能力 (competence) とは、言語の形式と意味の関係を説明する文法知識のことであり、限りない人間の言語能力を単に文レベルの文法組織のみに限定して追求したが、実はここに言語教育学的な理論の信頼性の問題が潜んでいた。これは次章で詳述する。

内的言語と社会共同体の言語

もともと言語が内的思考のためにあると言うフンボルトの言語内部発達説の考え方から生まれるもの、均質で理想的な話者によってのみ言語学の本質が見えるとか、こうした内にこもった机上の概念による理論構成が生まれる言語観の背景には、孤立した人間、つまり社会という共同体と遊離してことばを見るからに他ならない。チョムスキーが幾度となく引用する理想主義に徹したフンボルトの理論の世界は、均質なことばの世界というよりむしろ人間のグループや社会を省みない、内に籠った世界から生まれた理論ではないか。

自分の内部のみを観ずる態度からの言語観も必要だが、そこから出て、外の世界との相互作用から生まれる言語の実際からこそ、社会と密着した健全な社会言語学が生まれるのではないか。それが机上の規範言語学から人間の社会を見据えた社会言語学への飛翔である。

先述のように、2000年もの昔にプラトンやソクラテスが真理の追及のために自分の脳内で思考するだけでなく、町の雑踏に混じって身分の区別もなく様々な人々と思索したように、筆者は理想の言語を使うような話し手などよりこうした俗っぽいともいえる人々のことばの中に言語の本質が見えると思うからこそ、中でも外国語学習者のことばを中心に自分自身がまずボトム・アップの精神で研究してきたつもりである。

以上のような日本のチョムスキー旋風は、当の純粋言語学者のチョムスキー自身にとって、やりきれない誤解ではあったと考えられるが、現実にはこうしたチョムスキーの確信する言語観は、日本の英語教育界において現実化していったといっても過言ではないだろう。そして60年代から研究されてきた英語学英語教育の真髄は、生成文法が理想とする理想のネイティブ英語への「均質的な言語体系」であった(末延 2015)。

ことばは本来社会的行為であること、人類が社会的に機能するためのコミュニケーションのために存在することは誰の目にも明らかであるにもかかわらず、現代言語学は言語と社会との関係を絶ち、社会的な観点からの研究を排除した。そこまでは言語学者としての自由であろうが、結果としてそれが瞬く間に言語教育の世界に入り込んで、若人たちが言語が獲得・習得する過程やそれが使用される自然な社会環境をも無視することになった。

本章の最後にあたって、先述の『世界大百科事典』の「言語学」の項の最後には、「文法の面では、N. チョムスキーの提起した「変形文法理論」が一時期全世界的に支持者を獲得したかに見えたが、理論上の分裂傾向が強まり、またチョムスキー自身の考え方もかなり変化し、かつての勢いは見られない。…日本においては…新たな理論・方法論の開発・模索が続けられている。ただ、一方で外国の学説の無批判な受入れが見られる」場合があるということばが記されていることを明記したい。

3. 社会言語学の成立

ボトム・アップの言語観

前章では言語学、中でも現代言語学と比較することによって、自然と社会言語学が成立する方向への大まかな道筋を述べた。本章では改めて社会言語学^{注3)}成立の原点に立ち返って、その本質、目的などを考えることにする。はじめに、改めて従来の現代言語学と本章の主題となる社会言語学の差異を簡単に述べる。

現代言語学は従来の伝統的な手法によって、主として個人の内面的な言語の構造の現

象を規範的に捉えることをその責務としてきた。そのため往々にして言語の人間性、社会、意味、などを軽視または無視し、言語のための言語、言語至上主義に陥っていた面があった。言語の単に静的で物質的な面が強調され、まるで子どもが初めて手にした時計を不思議がってそのからくりを調べる（これも大切なことだが）ために分解して戻せなくなるように、それが何のために、その用途がどれほどに人間生活に恩恵を及ぼしているかを考えるよりも、むしろ内部構造をさらに深く見極めることに重点が置かれすぎて、社会言語学を通して人間社会の中の言語の意義に触れてくると、動きが取れなくなっていた。世捨人のように原理を目指すばかりに「山の仙人（トップ・ダウン）」にあこがれ、源流を目指して上流へと山上に辿れば水が一滴、その乾いた水溜り（pool）では人の気配もなく、仙人がひとり杖に寄り添い考え込んでいた……。

そんな中で一方、社会言語学は1960年代後半から1970年代に芽生えた若い学問で「里の仙人（ボトム・アップ）」といえる学問である。書齋で生まれた個人的で観念的な思考の理論化としての学問ではなく、社会とそれを構成する生の集団の様々な変種言語を、数量的・体系的に調査するために、言語と社会の本質から研究されてきた。

伝統的言語学を堅持してきた現代言語学では、文法は固定化した規則であるという考え方を持ち社会を無視してきたが、社会言語学は「あらゆる人間は個として存在しているが、同時に何らかの集団に属している。あらゆる人間にはいわゆる個性があり、過度な一般化を受け入れさせないか、同時になんらかの集団に共通すると想定される特性を有している（西原井上 p217）」と考えられるという。このように社会言語学は半世紀の歴史であってまだ若い学問ではあるが、今まで言語学的に多くの実証的研究がなされ、結果的には社会貢献を伴う様々な発見があった。

ウィリアム・ラボフ

社会言語学といえば第一に思い起こされるのがアメリカの言語学者ラボフ、Wである。チョムスキー旋風のさなかに、彼の一眼地味でかつ先駆的な社会学的な言語観に基づく人道的言語研究のいくつかを追いつつ、社会言語学の成立へと誘うことにする。

先進国ばかりでなく、何事においても強者が優先的な文化社会の中では、人間の文化、中でもことばにもなんらかの顕著な差異が見られる筈である。そうした言語的差別の片鱗が様々な階層の中で観察されることを見抜き、それを元に言語的被差別の人々の実情を浮き立たせ、そうした言語差別社会に対抗する論文の数々を世に示したのがラボフである。

たとえばアメリカの黒人英語差別に対する正当な言語学的解釈、かれらが自然に持っている言語能力を、言語と人間社会との言語的關係において解き明かし、それらを社会学的な言語学の言語観に立脚した言語理論として確立、社会言語学の礎を築き上げた学者である。以下に彼の先駆的な研究を紹介する。

ラボフの研究

ラボフの1964～66年の研究は、ニューヨーク市内で当地の英語使用者の社会階層とその分布を調査、そこに見られる言語変化を紹介したもので、これらが後に変異理論の基礎となった。たとえば *four*, *car* といった語に含まれる母音に続く /ə/ の発音の調査では、この発音を意識する緊張状況になればなるほど、階級の上下に係わらず /ə/ を発音する人が多くなり、中でもロウアー・ミドルクラスの人々はアッパー・クラスの人たちの英語を真似たがり、発音のハイパー・コレクション（過剰矯正）や語中・語尾に /r/ を過剰に意識して頻繁に用いることがわかった。現代言語学の範疇ではこうした発音に光を投げかけた研究は、現代言語学ではニホン英語の発音の多くがそうであるように、自由変異（Free Variation）として切り捨てられる運命にある屑である。

次にラボフの1967年の調査では、標準英語（SAE: Standard American English）とアフリカ系のアメリカベナキュラー（AAVE: African American Vernacular English）^{注4）} 話者の学校での些細な発音の違いがもとで、アフリカ系の子どもたちが教育という名のもとに差別を受けており、それが後々に彼らの言語のみならず総合的な人間としての成長に対して、いかに悪影響を及ぼしてきたかを論じている。

もうひとつはボトム・アップとしての研究である。ニューヨーク市の対岸にあるマサス・ヴィニヤード島が観光地として栄え、若い島民の間に発音の変化が現れたが、島の住民の発音の特徴を調査したところ、/əi/ と /əu/ の中舌母音化した発音を保つ年配者たちは、自分たちの美しい島の獵師としての誇りを持つ人々だと突き止めた。

ラボフは社会でのこうした階層の人々の生活レベルの次元から言語、中でもこうした言語学的に切り捨てられた発音でさえも見逃すことなく観察し、単に変化の傾向を見るだけでなくこうした発音の中に人道的な深みのある解釈をしていった。そのような彼を「標準を優先させる支配的文化に抗う社会意識を目覚めさせた反人種差別主義者（西原・井上 p260）」と評している人たちもいるが、まさに当を得ていると思う。

この時代のニューヨークでの社会的傾向から思い起こすことは、現今の日本の英語教師たちの多くが、島の獵師たちのような誇りとは裏腹に、ネイティブ英語としてのアメリカ英語の規範発音を、自ら涙ぐましい模倣の末に修得し、その苦勞を忠誠心という誇りに添えて学習者に厳しく真似させる、そのような英語教育と二重に映る。

これは、何としてでも教師と学習者にネイティブのアメリカ英語を、ネイティブらしく話させようとあくせくしている日本の文科省の、無駄な努力（過剰訂正など）に通じる。

このような外国語の点数主義によって、生徒の微細な文法的差異にますます神経質となり、生徒個人個人の本来の自由で貴重な学習精神が損なわれ、そして彼らの将来が左右され決定されるという深刻さは大きな問題であるが、それを改善しようとする傾向は文科省

にもどこにも見られない。

さてラボフによって深く開かれた言語学の社会への扉は、以下に羅列するハドソンをはじめ、フィッシュマン、ランゲ等によって、社会言語学の発展に広くかつ深く寄与してきた。フィッシュマンは生成理論の生得性と遺伝性について次のように述べる。

「黒人の子のその黒いことに対する先生の反応への対応は、遺伝的行動とみられる。かくて、社会環境抜きの遺伝的行動はなく、生得的メカニズムと衝突（それと制限、方向誘導）しない社会環境はない。説明的原則として生得性そのものあるいはそれのみを強調することは、人間の社会的行動の（したがってコミュニケーション行動）説明を不可能にする。(155)」と。黒人に対する言語差別は、日本で英語嫌いの子に対するそれと似ている。英語のできない子も遺伝と見られる傾向がある。こうして彼はチョムスキーの唱える生得性や言語普遍性の論議よりも言語の社会化を強調、むしろ平等な社会的環境の中でこそことばを学ぶことができることを示唆したといえる。

日本でも前述の論に加えて、英米英語とニホン英語という関係でこれと同じような傾向がいまだに続いており、これによってどれほどの苦しみを学習者たちに与えてきたかを見た（末延 2019）。こうした社会言語学の観点からの一連の研究は、今後ニホン英語の持つ秩序だった異質性の妥当性を啓発するために大いに役立つはずである。以上社会言語学の輪郭を紹介したが、次はラボフが現代言語学全体の方向転換を促すほどに大きく寄与した重要な業績、中でも先述した言語の変異理論をさらに深く探りつつ、ニホン英語との関係を論述する。

言語の変異理論 (variation theory)

ラボフの用語である言語変異について分かりやすく説明すると、かつては音声学者ジョーンズを初め英文法学者のクワーク、国際英語音声学のジェンキンズを輩出してきたロンドン大学の社会言語学者ハドソン R.A. は、言語の諸変種を定義づけるにあたって、言語を音楽に例える。「言語というものを世界中のすべての言語を含む 1 つの現象であると考えらるなら、音楽を 1 つの総括的な現象として捉え、いろいろな音楽の諸変種を区別するのと同じように、言語変種 (variety of language) という用語を言語のいろんな顕示形態を言い表すのに用いることができる (p40)。」という。

チェコの作曲家ドボルザークはドイツローマン派様式とチェコの民俗音楽を合流させて、「スラブ舞曲」などに見られるように「新世界交響曲」、「アメリカ」など米国を始め様々な国の文化を取り入れた。日本でも当時の政府から派遣された山田耕筰や滝廉太郎が見事な東西の融合を今も聞かせてくれるが、敗戦以来の日本政府はこのような文化の交流を、勝戦国アメリカへの言語的忠誠心や付度とあわせてどう考えているのだろうか。文科省がニホン英語ではなくアメリカ英語を使わせるという現状は、今吹いている尺八を取り

上げてクラリネットに取り替えるというのと同じで、それを拒否することのできない学習者は止むなく全員が罰点をもらうことになる。

くどいようだが、これをスポーツにたとえるとどうなるか。もしサッカー選手が天下を取れば、ボールを抱いて走るラグビー選手はラグビーのルールをすべてリセットしないかぎりいじめられることになる。しかしこれはスポーツの世界での話であって、ことばのルールはもっと広く寛容である。これをどうやら言語学者の中には言語レベルでも同じものだと混同している人たちが多いのではないか。

しかし音楽にはそんなルールがないから間違った音楽など存在しない。世界の言語は、異論はあろうが、すべて平等である。いずれ音楽だけでなく、変種言語間では少々ルールが違って、どの言語も互いにそれぞれの存在を認め合うような世の中になれば、このような言語のたとえも違和感もなく使えるようになるだろうと考えた。

以前本稿シリーズ (3) の「統語編 (語順)」(末延 2013a) でも述べたように、ことばというのは本来それほどにおおらかで、融通が利くのである。その証拠に本稿の「はじめに」のところで紹介したように、人はそれぞれの社会・文化に属しており、それぞれ一人一人が独自のことばの使い方をしていること、中でもヨーロッパではそれぞれの国の人々がそれぞれ例外なく独自の英語の変種を誰に遠慮もなく堂々と使って互いに交流している姿を見た。その半面、融通を利かせないことに命を懸けている言語学者が世界にはいかに多いことか。

言語の変種 (language variety)

アメリカでは SAE (Standard American English) がアメリカ人の標準英語であり、それはアメリカ社会全般と学校教育の場で公然と認められているが、ラボフが研究を始めたころには、公然と認められていない言語があった。それが、アフリカ系の英語 AAVE (African American Vernacular English) でそれは変種英語であるからという理由による。ではそれはなぜ認められなかったのか。ニホン英語の抱える問題と類似する。

それはニホン英語と同じ運命を背負っていた。世界にはさまざまなレベルで実際には使われている、それらのレベルの言語が社会的にどのような規準でランク付けされてきたか、について記しておきたい。ランゲによると言語使用には①変種言語を認める国家、②認めないでひとつの国家語で統一する (p163)、という傾向が一般に見られるというが、統一言語に対する諸決定については「あらかじめのなんらかの政治的決定に依存している。それぞれの言語にはなんらかの先入観が宿っているので、差別するものと差別されるものがいやおうなく存在する。(p174)」と。思うに、河豚を食べさせてはいけないという文化、それは命にかかわるために政府が規制するものであるが、蛸やイカを食べさせない文化、それは自由や人道的に優れた文化の下では、あくまでも個人の自由が保障されるべきであ

る。

さてラボフは以上のように言語の変異性を社会的な観点からとらえた。チョムスキーの言語理論の一つである「言語の普遍性」といういわば架空の理論を啓蒙することよりも、社会言語学者たちの間では現に存在する「言語の変種性」を重視する必要性が、時遅しとばかり、当然の成り行きとして出てきたのである。ラボフたちはその変異性の研究を従来の仮説理論のような架空性を排除し、変項規則 (variable rule) を用いてさまざまな変種の現象を数値化・数式化した。そんな中で若い社会言語学者たちの間で、生成理論の観点からすると実に驚くべき言語観に基づく次のような論議があり、これらは社会言語学とともにニホン英語の進歩にも追い風となった。

標準語と方言

ハドソンは「言語と方言」を区別できるか (p37)、と問う。社会言語学的にみれば、標準語は変種と対抗し、現代言語学では言語といえば規範的で均一な標準語を指す。では標準語とは何か。ハドソンは、標準語とは「社会による直接的で意図的な介入の結果である。 (p52)」と明確にいう。標準語は選択→成文化→機能の精密化→容認、という意図と経路をもって造られ、それはチョムスキーの生成理論を基盤とする現代言語学に賛同する言語学者たちとともに、こうして標準語は言語学的な証拠もなく人為的にトップ・ダウン式に作られるものであると分析した (p52)。この流れはついに現代言語学の存否にせまる王手だと筆者は捉えた。

これを日本の英語教育で考えると、英米英語を標準英語とし、これをもとにセンター試験や共通試験などもほぼ同じ行程を経て造られてきたと考えてよい。その上で、ニホン英語をはじめあまねく英米英語の変種の英語を排除した上で、単に選抜する言語の使用範囲を狭め、共通試験のような国家試験では各問題が便宜的に唯一の解答以外は認めないようにするという形で実施される傾向が近年益々強くなってゆく。

では標準語の対となる方言とは何か。『共通語世界史』の著者アジェージュ C. がいうように「方言は、ある言語の口語的な使用域、あるいは理解困難になるほどかけ離れてはいない言葉として特定された変異体である (2018 p186)」と、一般では地方文化の一つとみなされてきた。ところがハドソンの観点は両者を社会文化の中で捉え、「言語と方言を区別することは英語文化の1部である (p50).」と淡々と、あっけないほどに言い切ったのである。このようなかたちで両者を区別することは、区別でなく明らかな差別であることを匂わせる表現である。まさにすべての言語に差別はあってはならないと忠告するかのよう、そのような「言語差別文化」の国で生まれた言語観は、稚拙で野蛮であり遅れた学問形態にあるといわれることになりはしないか、と。

往々にしてアメリカのような先進国の文化を持つ言語学者たちからすると、これは自

分たちの縄張りの中に収めている大切な言語学的に理想とする標準語としての言語を、単なる自国の文化の一部と捉えられなくなるわけで、現代言語学者の観点からすればとうてい我慢できない、許せない戯言としてしか応戦できない。が、ハドソンの社会、文化的な言語観からすれば、理論的にはまさにその通りである。そうなれば彼らの使う言語学の「標準語」ということばは、社会的、文化的偏見の塊としての過去の言語学の負の遺産としての用語ということになり、現代言語学が見せかけの規範文法を権威のかさとして成立する人権偏向の言語学体系だといわれかねないだろう。

ただしそれは言語という言葉自体の中に偏見があるわけではなく、それは今までの言語学者と呼ばれる人たちが作り出した偏見が、社会、文化という観点からすると浮き彫りになったということになるだろう。それと同じように、ネイティブ英語に権威を持たせて擁護する一方、ニホン英語を軽蔑するのは、日本の文化でも習慣でもなく日本の言語学者の不勉強であり未熟であり、言語的未開の文化、仮初の威厳、偏見である。

これについてハドソンは「相互理解可能性はサイズに関して、言語の範囲を定めるための基準としては機能しないのである。それに代わるものとして考慮に値する基準は他に何もないので言語と方言に真の区別はない。つまり x 語と言う概念は社会言語学において何ら用をなさないのである。…要するに我々に必要なのは xxx 変種という概念とある特定の変種は他のいくつかの変種に比べて類似しているとか異なっているかというようなはっきりした当たり前の観察なのである (p58-9)。」と。

続いて「皮肉なことに学問としての言語学は英、米、フランスのような標準語を持つ社会のみに生まれ、言語学者が注意を向ける最初の言語は彼ら自身の言語、つまり標準語なのである (p54)。」と書き添えている。以上のようにハドソンは現代言語学に対して言語学的のみならず人道的、社会的にも説得性に富んだ理論をもって反省を求めたと解釈できる。

標準語と変種間の境界線

変種を認めるか否かという境界線を考えてみよう。ハドソンは「共同体の中には一致が優勢な共同体もあれば、個性が優勢な共同体もある (p27)。」というが、これはネイティブ英語を優勢とし、ニホン英語を間違ったことばとして国家が試験し、消滅させるという圧力ばかりか責任を、日本の言語学者たちと共に有することを暗示する。

社会言語学と現代言語学の違い

フィッシュマンによると、現代言語学と社会言語学については、前者は「言語という範疇を、与えられたもの、通常の文法記述の仕事から手渡されたもの (p4)」と考えるのではなく、後者では「何が『言語』として、言語の意味のある形式としてみなされるかという問題を未決のものとして扱うことが提唱されている。(p4)」という。つまり言語とは何

を以って定義できるかという問題を、現代言語学のように単に伝統を継ぐのではなく、また規範がないからこそ社会の中で言語とそこで表れる言語の予期せぬさまざまな現象自体の眞の存在を追求する対象として見るというものでありたい。それがまさにこれこそ社会言語学の基本理念であろう。

言語社会学が最近まで発達しなかった若干の理由としてフィッシュマンは次のように述べている。「言語学の方がまったく規則的な完全に予測可能なものに関心を抱き、そうでないものはその対象から締め出す傾向にあったのに対して、社会科学の方がそのような不変的なものについて全く関心を持たなかったことである (p149)。」と。

これは言語学の変遷を元に、社会言語学が芽生えてゆく様子をうまく表現している。日本では言語は移ろふことこそよけれ、禅ではことばは口から出たとたんに消えるからまるで屁のような物だという。このほうがむしろ科学的だ。ランゲは、言語を文化的な脈絡から隔離（その意味さえも）してきたブルームフィールド派に対して、サピア派のバイクは、時と共に社会の中でもまれて移ろい行く言語現象を一般行為体系のなかに埋め込むことを提案したという (p52)。最後にラボフ等の業績をまとめると次の通りである。

1. 言語変異が社会的な階層とスタイルの階層の双方を標示することを明らかにした。
2. 社会言語学的変異という概念を用いて社会的階層と進行中の言語変化を記述する方法論を確立した。「変異理論 (variation theory)」ということばはラボフの用語である。
3. ラボフは非標準的とされる英語変種の研究に、記述的にも理論的にも貢献した。
4. 文法は固定化した規則であるという考え方をもち伝統的言語学からの、実質的な離脱を示しており、社会のなかでも分布のばらつきがあり、それに意味を読み取ろうとするものである。これは「文法は固定化した規則であるという考え方をもち伝統的言語学からの実質的な離脱を示している (西原井上 p259)」という。

4. 社会言語学による言語教育の進展

社会言語学の言語教育観

海外交易のための英語の変種としての国際英語の使用は、ピジンやクレオールが自然なかたちで進展してきたように、世界中でも日本人にとっても今に始まったことではない。海外で交易してきた日本人も、百年以上も前からお互いの国々の母語の影響を受けた特有の英語なまり、つまり変種英語としてのニホン英語を、何のわだかまりもなく、互いに理解し合おうと努力しながら自然な形で交易してきたのである。たとえば長期にわたってイギリスの支配下にあったインドでさえ、自然に生まれたインド人独自の英語を駆使し、今ではイギリスの英語を征服したといわれる。

ところが日本では問題は敗戦を契機に、以来文部（科）省はあまりにも度が過ぎたア

アメリカ忠誠、忖度がはびこり、日本人には自然言語の自然な言語学習とは裏腹に、アメリカ英語を母語とする話者と同じ均一の理想の言語究話者に仕立て上げようとしてきた。そして究極の英語話者と奉ってきたアメリカ英語を、表向きには指示がなかったものの、国家の規範として忠実に正確に真似るよう啓蒙することを第一とした。

それに並行してほぼ一世紀にわたって、自然に育ってきた国の文化言語であるニホン英語を排撃し続けてきた。そうしたことが原因で、多くの英語嫌いを増やしてきた(末延 2019)。このような環境を作りあげ、さらにこの筋道を加速させながら今に至っているのは、言わずもがな国の意を忖度してきた我々語学関係者の誤った言語観、未熟さによるものであり、その点で現代言語学の言語観はもとより、それを英語教育の柱としてきた責任は大きい。

変種英語としてのニホン英語が、世界ではその存在と有用性は当然のこととして認められておりながら、日本の英語教育では事実上制度として公けには認められておらず、それをを使う者は無教育、下品、恥とされるのが現実だ。だからといってネイティブ英語はもちろん遠い存在であり、そのどちらにも使えずニホン英語は禁止され、ただ訂正されるべきものとして存在する。次はこうした実情が改善されない中で、社会言語学の言語観によって今後日本の教育をどのように発展させ、貢献できるかを述べる。

社会言語学とニホン英語

さて、社会や人間関係を無視し、言語そのものの構造研究を主体とした言語学のための言語学至上主義の下に、自分たちの築き上げた理想を掲げる均質言語学、規範言語学、規範をそっくりそのまま模倣させる言語学者たちがカバーしてきた言語、言語学であった。その砂上楼阁から、社会言語学、つまり人間が参加する言語学へ、人間の集団としての社会と言語の関係へ、人間の平等と言語に対する見方へと、人間的言語観への成長が期待できる時代へと舵取りが変わりつつある。

国際化のための世界の人たちがともに平等な言語観を持ちはじめた言語環境の中で、社会言語学の言語観は外国語学習、言語学習者の苦しみを解きつつある。この21世紀のはじめに少なくとも日本では、ことばの、中でも一世紀にわたる西欧崇拜の言語観を持つ言語学者、言語教育者たちの時代から、社会言語学という学問を通じて学習者のための英語教育のルネッサンスが始まった。しかし現実甘いものではない。

自分ではアメリカ英語だと吹聴しながら、実際には誰が聞いても完全な非標準の英語、つまり教師や学習者も、帰国子女などを除いてほぼ100%とっていいほどにニホン英語を使っている中で、ネイティブ英語に圧倒されている現場の教室英語の実態が明らか(末延 2019)となった。社会言語学の言語観は人間の社会共同体の中で学び使われるべき言語として、学習者側、つまりボトム・アップの観点から次のような研究成果を生んでいった。

差別のない学問研究の態勢造りとその教育

バーンスタインのコード分類

ロンドン大学のバーンスタイン, Bによると、イギリスの社会では様々な変種英語が使われており、それは大きく分けて精密コード (elaborated code) と制限コード (restricted code) に分けられるという。前者は中産階級で使われ、文法が複雑で文構造が複雑で語彙が豊富であるため、より精密なコミュニケーションが可能で、これを使う人は学校教育のみならず社会社会にでてからも大いに有利になるという。

これに対して後者は労働者階級で使われ、文法構造が単純で文や語彙が少なく、これを使う人は学校では認められないため学歴は低くなる傾向があり、この傾向が続くと社会階級が固定化され、中でも成長過程にある子どもたちにとって学校教育では大きな不利、負担となるという。これは語彙が豊富で抽象的な表現ができにくいという精密コードと比べて見方によっては制限コードは「欠陥言語 (トラットギル pp50-57)」というレッテルを貼られかねないという問題が生じてくる。しかし後者の言語を使わざるを得ない人たちにとっては、これでは言語の平等性から見て明らかに社会的不平等であるというのである(ランゲ pp82-86)。

これもニホン英語も通じるところが多い。国家レベルのセンターや共通試験では、いやおうなく制限コードによる解答は切許されないからである。学生たちにとってはまさに一か八かとなる。選択肢問題でも 5 点か 0 点の二者かでなく、努力を認めてせめてそれ相応の 4, 3, 2 点といった人間的なもっと細かい段階が必要である。これによる成績は人生の進路、進学、就職等に関わる重大事項である。その対処策として筆者は以上のようにせめて初級・中級では教室内での訓練中は制限コードも認めること、共通試験でも配点にさらに細かい寛大な手を加えるべきではないかと再三提案してきた。

バーンスタインは「大衆言語には、話者の社会的地位と精神状態を保護するメカニズムが組み込まれている (バーンスタイン 1961,1970、ランゲ p81)」という。これはあくまでも母語のことを念頭においていると思えるので、ニホン英語の場合とは相当違いがあることは否めないが、程度の差こそあれ基本的には同じ環境である。日本の国家、社会にニホン英語を保護するメカニズムがあるかといえばそれはむしろ逆である。しかし国際英語、アジア英語の一つとしてニホン英語は世界レベルでは保護されてきたし、今も変わることはない。問題はネイティブ英語の模倣に苦しむ学習者側にあるという以前に、私たち教授者自身のそうした英語に対する意識こそが何らかの影響を与えてきたのではないか。

ニホン英語コードとネイティブ英語コード

ランゲは次のように述べている。

「… 標準英語と黒人英語のどこがどうことなるかという疑問にたいしては、多くの学者

たちがふたつのことなる言語形式は表現のしかたのちがいによるものであるとこたえている。だから、黒人にたいする言語教育では、黒人英語から出発しなければならない。標準英語を教えることは黒人にとって、一種の外国語教育なのだ (pp54-55)。」これも日本人にとっても似た状況だ。従来、ネイティブ英語とニホン英語を対立的に捉えてきたがために、何が何でもネイティブ英語一本やりという忠誠心の精神で、ニホン英語を撲滅してきた。今の日本人は100年たっても出来るはずのない、やる必要のない英米の標準英語を、やむなく矯正させられているが、一方、インド人が英語をしゃべる時進行形をよく使っている、それらは彼らの仲間同士のみならず、世界の変種英語を使う人たちから公然とインド英語として認められてきた。中国英語で当然として使われている I don't know who is he. も同様である。しかし日本ではこれらの用法は日本のセンター試験や共通試験では罰となる。もはや国際的な問題である。

*Open Japanese*としてのニホン英語

ニホン英語は筆者は英語で *Open Japanese* (開かれた日本語) と呼ぶが、その目指すところは英語の変種というより、あくまでも母語としての日本語の土台の開かれた形としての日本語の変種として位置づけるものである (末延 2011)。もはやアメリカのネイティブ英語に隷属する *Japanese English* でなく、世界に開かれた第二の日本語たる所以である。

日本語が発音面 (末延 2014) でも文法面 (末延 2012 ~ 2013b) でも、いわゆるコミュニケーション事象の面で譲れるところは譲り合い、英米語との間にぎりぎりの妥協の接点を見出すことが望まれる。これはたとえば現時点では和製英語が日本語のなかに単に単語として登場してきたに過ぎなかったのに対して、ニホン英語の構造上で堂々と使えるようにという時点を考えてみてはどうだろう。そうしないと現今のような英語教育に見られるような、日本人に想像を絶する負担がかかっているからだ。

それにひきかえ、英米のネイティブ英語はあくまでも完全な外国語としての英米文化のなかに育った人たちの使う言語であって、いくらなんでもこれを言語文化のまったく異なる人々に真似させるのは無理であるばかりでなく、第一その必要もなく、言語道断である。その規準は前述のハイムズのコミュニケーション能力、最小限のコミュニケーション規則という点からどれだけ通じるかに尽きる。

それと、「直せる間違いは間違いではない (末延 1991)」という点から、文法や発音の無駄を全て排するというソシユールの改革をかつて紹介した (末延 2017 pp93-98)。この考え方は英語に限った事ではない。たとえばイタリア語の「ためしてごらん」は *Prova* (=Prove) のように、ほとんど同じだからそのまま使えるもの (中にはそのまま使えないものもあるが) から始まって数十万の和製ニホン英語がすでに存在し、その多くは日本人のみならずネイティブの英米人、英語圏以外の人々にも推理して使える。

それほどの恩物がすでにあるのだが、これを恥ずかしい英語だと信じこまされてきたからといって、使おうとしないのはもったいない話である。現代言語学の言語観であることばの均一性、つまり非寛容、堅苦しさこそがコミュニケーションの便利さをさえぎってきたが、コミュニケーション能力、コミュニケーション規則の原点は堅苦しいものではなく、寛容の精神である。

チョムスキーの言語能力と社会言語学の伝達能力

チョムスキーの「言語能力」(competence) という用語は単なる文レベルの「言語の文法知識」のことであったが、一方社会言語学ではゲル・ハイムズがコミュニケーションをより充実した形で強調するために「伝達能力」(communicative competence) という理論を生み出した。繰り返すが本来の「コミュニケーション能力」というのは、プラトンやアリストテレスが町の人たちと同じレベルの言語を話したように、本来社会、言語共同体という場の中で行われる生の言語行為ができる能力であって、それが言語共同体から言語の適切な使い方だと平等に認められてこそその能力とした。

コミュニカティブ・アプローチ

社会言語学の立場からすると、ことばの授業ではことばを通じてのやり取りが重要な訓練の一形態であり、その方法としてコミュニカティブ・アプローチがある。これは現代言語学の教育的観点だと “It is fine today.” や “It is six o’ clock.” の使い方を教えるのに、「It を主語とする用法」のような文法上の名称事項を学習の単元とするが、社会言語学の視点に立ったコミュニカティブ・アプローチでは学習者の視点で言語の機能の学習を重視するため、学習の単元は「天気」や「時間」となる。

社会言語学の中のニホン英語

チョムスキーの提唱するような、単に観念的な言語の形式に関する知識や能力を指すのでは、ことばの能力というのはあまりにも狭義で平面的であり、ましてやそれが母語話者や言語学者の天与の直観だからというだけで彼らの判断や規範だけから正否を決めるのは、非科学的な決定方法であるとした。そして母語話者としてのその直観こそが、危険なことには、えてして言語学的にも英語教育的にも今まで言語差別を生む発信元であった。こうした言語観のもとに、コミュニケーションの研究は、社会言語学の範疇でこそ進められるべき学問であると考えた。

以上のようにしてハイムズは現代言語学の問題点を明らかにしてきた。ここに社会言語学の中でも常に特に教師から生徒への伝達というトップ・ダウン的教育ではなく、逆に生徒から教師へ影響を与えるような、互いに人間としての言語として平等な教育面へ向けての萌芽が見られる。

通じない英米語

さてこのような考え方からすると、筆者はすでにネイティブ英語は国際的に最も通じない英語の一つであることを再三指摘してきた(末延 2011, 2012)。こうした種の英語がたとえ英語の始祖だからとはいえ、国際的にもはやされている現状を見て、言語学者たちはこの矛盾をどう捉えているのだろうか。英語教育者たちは、ネイティブ英語の話者たちが相手かまわず勝手気ままに高速度で喋り捲るのを、ただ呆然とついてゆく努力に終始することでもいいのか。

それでもなお日本政府が提唱する英米英語が国際的に見て最も模倣すべき大切な言語だとか、言語の理想的な姿といえるのか、こうしたネイティブの横柄さに言語教育者たちは激しい怒りをもって対抗するべきではなからうか。言語学は内容とともにそれを通じさせる実用性を目的に、コミュニケーションをより幅の広い意味として双方が伝わりあうことが必要である。

ネイティブ英語からの脱却

ランゲからの引用によればバーンスタインはいう。「学校は大衆言語の使用を根絶しようとしてはならない (p82)」と。つまりここから判断できることは、現実では日本の英語教育では、英米英語しか認めない。日本はニホン英語を認めない国家であるといえる。自由な教育のなかに言語規定を押し込むべきではない。箸をフォークとナイフに持ち替えさせよというとしてきた文科省はニホン英語を排除し、英米英語のみを正当な規準として日本の生徒たちに対して試験してはならない。自由な教育のなかに言語学的に誤った言語観に基づいた言語規定を押し込むべきではない。

標準語至上主義からの脱却

ハドソンは「x語ではなくx方言を定義する (pp12-3)」という。つまりx語というのは単なる概念であって存在せず、すべての存在する言語はx方言に他ならないと定義するものだとは筆者は理解する。もしそうであれば何とおおらかな定義であろうか。ニホン英語も自然と少なくともアメリカ英語と同様、英語の一方言として認めるべきことになる。学問に上下なく、標準語、方言の差別もなくこうした多様化はさらに学問の平等性を深める。それが収斂を繰り返す場合もそれはそれでよい。なぜならそれによってニホン英語はなおさら広く深く磨かれるのが倣い、それが世の習いだから。

5. 結語

言語学的天動説からの脱却

ニホン英語は表面上、英米英語の影響を受けながらも、多くの日本人が母語としての日本語を学んだ後に外国語として英米英語を学習するという観点からすると、その基盤は本

質的に日本の社会と文化、中でも母語としての日本語が副産物として造り上げた言語である。それは同時に世界の60数種存在するといわれる変種英語の一種でもある。また、ニホン英語は英語の非母語的変種と考える前に、日本文化の結晶として生まれ育った「日本語の変種 (Open Japanese)」である。以上、本稿では社会言語学はニホン英語をはじめ、それらの母語の変種の存在とその意義を論理的・言語学的に立証したことを論じた。

絵画の世界でいえば、美しいものや人物をより美しく描くことこそが絵画だと決め付けていた退屈なマンネリの時代を経て、あるときから日常の道草やありふれた光景のなかにこそ美しさがあることを見出し、堂々とそれを絵画にしたり、はてはゴヤのように戦争の殺戮(さつりく)のような醜い絵画さえをも真実の表現として描くようになった。絵画の価値観を変えたのである。まるでハッブル望遠鏡が宇宙観を大きく変えたように、社会言語学の出現は、型にはまった日本の英語教育のルネッサンスとっていい。

従来の言語の守備範囲は、ソシュールがホイットニーから学んだ言語の社会集団性の必要性、つまり「社会言語学」によって言語構造の規範に縛られることからの脱却を構想していたその瞬間(末延 2015)から、全世界の言語学界に遍く広がっていくはずのものであった。しかしそれとは真逆に言語の均質性という概念が取り入れられることで言語学の範囲がかえって萎縮し、その縄張りが頂点に達した、つまりソシュール他によって“地動説”に進みかけ社会性を帯びはじめてきた言語学が、再び現代言語学、中でも生得論、生成理論の進展によってその軸が“天動説”に戻つつある、というのがこの半世紀であったというのが筆者の思いである。それはチョムスキーをはじめとする言語の内的な構造のさらに深い研究という面では発展があったものの、それは同時に言語学全体の本質を揺るがした、言語学習者・教育者たちにとっては取り返しのつかないほどの悲劇でもあった。

変種間および人間間の理解

ハドソンが指摘してきたように「相互理解可能性は本当は諸変種間の関係ではなく、人間間の関係なのである (p57)。」というのは互いに理解しあう変種同士というより、畢竟人間同士の問題だからであるということになる。とすると変種間という言語上だけの関係で理解しあうのではなく、そこで生活する人間、しかも社会を構成する人間間の相互理解可能性の度合いというのは、変種間の言語項目の重複の度合いだけではなく、そこに関わる人々の互いの理解し合いたいという気持ちを持った人間同士の資質によるということになる。つまり学者間の言語観以前の、俗世間的なレベルの問題や、人間関係の低レベルの意識の齟齬がそれを阻止してきたことを暗示する。

当然のことだが、「他者を理解するということは、常に聴き手の側の努力を必要とするので動機付けが重要なのである。たとえば動機付けが低いときにコミュニケーションが打ち切りになる可能性を考えていただきたい。そこに関わる二変種間の差異が大きければ大

きいほどより多くの努力が必要となる (ハドソン pp57-8)」のである。言語学という学問自体がこれに立ち向かうことができなかつたために、他の学問と比べて遅れている学問の一つと指摘されてきたのも無理はない。言語学こそが率先してこの理を彼ら自身が専門とする“ことば”を介して実行し、ことばを用いて広めるべきであった。皮肉なことである。

日本ではこの半世紀、規範文法をさらに理想化することで一方では変種英語を排撃し、社会的弱者たちを尻目に言語差別を繰り返しながら社会から隠遁してきた現代言語学が主流となってきたことが明らかとなった。さらに英語教育はあまねくネイティブ英語の教養養成の世界にあって、英米文化の中で先祖の残した難解な標準語の英米文法の模倣に依存し、それが難解であればあるほど学習者たちは苦しめられ、その一方では筆者を含む英語関係者たちの生活を支えてきたことも明らかとなった。

母語としての日本語が基盤のニホン英語

こうした社会現象を排除するいびつな言語観を、ハドソンは「ある言葉を使う社会と関連なく言葉を研究することは、使われる言語構造を社会的に説明する可能性を排除することになってしまう (p13).」と警告しているように、ニホン英語はネイティブ英語の単に構造だけを取り上げて云々するようではなく、その前に重要なことはニホン英語を生んだ基となる日本語との関係を、しっかり研究しなければならない。ニホン英語は確かに英米語と比べて劣るように見えるかもしれない。しかし両者をそれぞれ同じ社会言語学の観点に立って研究する時、変種言語としての変種ニホン英語の真の価値がより明らかになってくる。ニホン英語もこうした社会言語学の言語観にたつことで、差別される理由はないことが分かった。

こうした考え方から「ニホン英語」について見ると、英米人の英語は彼らの言語共同体、文化を基に生まれた、彼らにこそ最も相応しい英語の変種であって、これを他の異文化の中に強制することは厳に慎むべきである。翻ってニホン英語は日本人学習者から生まれた日本人に最も相応しい母語の日本語を基とした英語であるから、日本人が学ぶに一番相応しいことが明らかである。

大衆言語としての変種英語

またハドソンはやや間接的な表現ではあるが「…言うまでもないことだが、ここ数十年の間に展開されてきた言語理論のすべてに、理論提唱者の非社会学的研究方法に由来する深刻な欠陥があるらしいこと…そのことは認識しておく必要がある。(p34)」と。人道的な立場から、社会環境を無視し除外した従来の言語学者たちの、ハドソンの表現からすると「未熟な」とはいえ、実際は間違つた言語観による外国語教育が、学習者に与える甚大な取り返しのつかない影響を警告している。

あらためてバーンステインは言う。「学校は大衆言語の使用を根絶しようとしてはなら

ない。大衆言語は固有の美学を持つばかりでなく、話者を仲間とその地方の伝統に精神的に結び付けたりするのである (バーンスタイン 1970 pp344-347、ランゲ 2001 p82)」と。バーンスタインの研究者であるゴードンとウィルカーソン (1966、西原 p 269) は、このような労働者階級の子どもたちに対する言語差別に対して「民主主義社会で、言語による社会的不平等を恒常化させるべきではないという規範的な考え」のもとに「賠償的な教育 (西原 p269)」を求めたという。

また言語普遍説にしても、社会や大衆を尻目に、ただ脳内言語の閃きが本能論や普遍文法を生み、それを人類の共通の言語だと啓蒙したとしても、「人間どうしの心のことばは人類一つである—自分の習慣を捨てず、相手の習慣も大切にしよう」というハンガリーのバヤ、モハーチにある記念碑のことばは、天才の頭に浮かんだ普遍文法の存在とは質を異にする。多くの国々に囲まれ、翻弄されてきた歴史を持つこの国の人々の、血のにじむようなことばだからこそ、人々の胸を打つのである。

現代言語学から長期にわたって無視され排撃されてきたニホン英語も、以上のようにして社会言語学の観点から、言語学的にも認められることが明らかにされてきた。今、さらなるニホン英語の正当な位置づけとその啓発のためには、社会言語学者や情報学者の助力もさることながら、国家の英語に対する正しい言語観を理解させ、ネイティブ英語に苦しめられている学習者を救う意味でも、従来の英文法学者・教師たちが社会言語学者たちの言語観を研究し、ニホン英語の研究がなされることを期待する。

謝辞：本稿の完成に当たって言語社会学に関する様々な資料を参考にさせて頂いたが、中でもニホン英語研究にとって最近の海外における貴重な情報を多々受けることができたのが西原哲雄他監修の『言語研究と言語学の進展シリーズ 第 2 巻「言語の認知とコミュニケーション」(開拓社 2018)』であったことをここに記して感謝したい。また、本稿のために資料整理等の面でたえず誠意をもって助力して下さった関西学院大学教育学部谷口博紀君に、紙面を借りて感謝したい。

注 1) さらに生成理論が切り捨てた言葉の機能については、社会言語学では自己の心情を表す「表出 (expressive)」と、相手に働きかける「指示 (directive)」、それに対象事物を描き出す「叙述 (representative)」の 3 つの機能を掲げている。

注 2) たとえば年号名などの裁定。

注 3) 社会言語学と言語社会学の違い：フィッシュ入門第 1 章序論 3 ページでは社会言語学を社会に関連して言語を研究することと定義し…言語に関して社会を研究することが言語社会学だという。

注4) 西原他 (2018) によるとベナキュラー (vernacular) とは、「その集団固有の日常語で standard に対する概念である。変異は一見パフォーマンス・エラーのようにも見えるが、変異理論では、個人あるいは集団が持つ言語知識の一部として考える。標準から比べれば混沌として無秩序にこそ見えるが、そこには規則性、秩序があり、インフォーマルではあるが低次元の論理が働いているとされる。Standard の理論とは異なった理論が働いているとされる。これを『変異規則』、『秩序だった異質性 (ordered heterogeneity) 1968』と呼ぶ。」

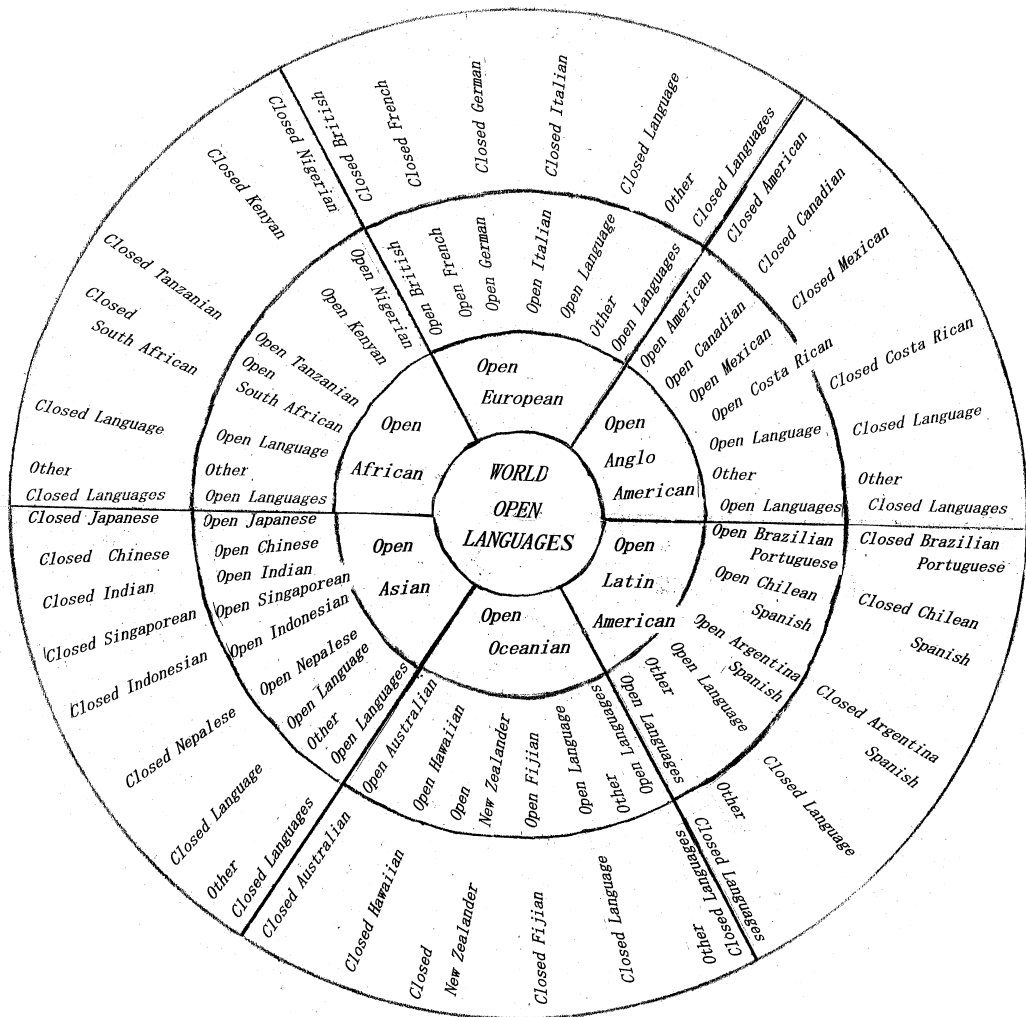


図 1
WORLD OPEN LANGUAGES (CONE)
by SUENOBU, M. (末延 2011)

参考文献

- アジェージュ, C: 『共通語の世界史—ヨーロッパ諸言語をめぐる地政学』 糟谷慶介・佐野直子訳 白水社 2018.
- バーンスタイン, B.: Education cannot compensate for society, in: *New Society*. 1970.
- チョムスキー, N.: (Noam Chomsky. *Language and Mind*. 3rd ed. Cambridge University Press, 2006) 『言語と精神』 町田健訳 河出書房新社2011.
- フィッシュマン, J.A.: Fishman, Joshua A. *Sociolinguistics. Brief Introduction*, Rowley/Mass. 1970. 『言語社会学入門』 (湯川恭敏訳, 大修館, 1976.)
- : Fishman, Joshua A. : *Language Loyalty in the United States*, The Hague, 1966a.
- ハドソン, R.A.: Mudson R.A.: *Sociolinguistics*. Cambridge; Cambridge University Press, 1980. 『社会言語学』 (松山幹秀 生田少子訳 未来社 1988.)
- 平凡社 『世界大百科事典』 1998.
- 伊藤克敏編 『ことばと人間』 三省堂 1986
- 中島文雄 『英語の構造』 上下 岩波書店 1988.
- 西原哲雄他監修 早瀬尚子編 『言語の認知とコミュニケーション』 言語研究と言語学の進展シリーズ 第2巻 開拓社 2018.
- ランゲ 『社会言語学の方法』 三元社2001.
- ラボフ, W: *The Social Stratification of English in New York City*. 「ニューヨークにおける英語の社会階層」 Washington D.C.1966b.
- スミス, S. 『チョムスキーの言語理論』 新曜社 2019.
- Suenobu, M. : *Errorology in English*. Yugetsu Shobo, 2002.11.
- *The Preparation Theory of the Origin of Language*, UH Monograph LXXVI, The Institute of Economic Research, University of Hyogo, Kobe, 2006. 和書として『ことばの元を探る—知恵と文字の仕込み』 神戸商科大学研究叢書LXXI, 神戸商科大学学術研究会 2004及びグローカル新書 天理大学おやさと研究所 2005.
- 末延岑生 「ニホン英語」 本名信行 『アジアの英語』 くろしお出版 1991.
- 『ニホン英語は世界で通じる』 平凡社新書 平凡社 2010.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) をデザインする」 (1) 『芸術工学2011』 神戸芸術工科大学 2011. 及び <http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html> で検索.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (2) (形態編)—アジア英語 (*Open Asian*) を礎として」 『芸術工学2012』 神戸芸術工科大学2012. また <http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html> で検索.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (3) —統語編 (語順)」 『人文論集』 第48巻 兵庫県立大学 2013a, 及び『日本語学論説資料』 論説資料保存会第51号に転載。また nii.ac.jp にて mineo.suenobu で検索.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (4) —統語編 (時制)」 日本「アジア英語」学会 2013b.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (5) —音声編」 『人文論集』 第49巻 兵庫県立大学2014, 及び『英語学論説資料』 論説資料保存会 第48号「音韻論」の項に転載。また nii.ac.jp にて mineo.suenobu で検索.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (6) —歴史編 (イギリス偏向の英語教育—

- 第二次世界大戦前夜まで)』『人文論集』第50巻 兵庫県立大学 2015. 及び『英語学論説資料』論説資料保存会 第49号に転載。またnii.ac.jpにてmineo suenobuで検索。
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (7) —従米から屈米への日米外交』『人文論集』第51巻 兵庫県立大学 2016. 及びnii.ac.jpにてmineo suenobuで検索。
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (8) —日本人の言語観・言語教育観 (台湾統治時代の日本語普及政策から)』『人文論集』第52巻 兵庫県立大学 2017. 及び『英語学論説資料』論説資料保存会第51号に転載。及びnii.ac.jpにてmineo suenobuで検索。
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (9) —「宿命」の心理学」から「心ひとつが我が理」の心理学」へ — 『人文論集』第53巻 兵庫県立大学 2018 及びnii.ac.jpにてmineo suenobuで検索。
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (10) —日本の高校生の英語学習観を探る(ソシユールの言語観を礎として)— 『人文論集』第54巻 兵庫県立大学 2019 及びnii.ac.jpにてmineo suenobuで検索。
- 他「日本人の英語—その形態的・統語的特徴」『人文論集』31-1 神戸商科大学学術研究会 1995.9. 及び『英語学論説資料』第30号, 論説資料保会に転載。
- 末延 岑生 『世界一周旅行記—世界の人々はどんな英語を使っているか』神戸商科大学末延研究室 未刊 1969.
- タイラー, E. B. 『原始文化』1871.
- トラッドギル, P. :Trudgill, Peter: *Sociolinguistics*. Penguin Books Ltd., London 1974. (『言語と社会』土田滋訳 岩波書店 1975.)

